

# 野幌の植物の行方

村野紀雄

## 1. はじめに

野幌森林公園に住むようになってから、ちょうど20年になる。

初めのころは、その大木の生い茂る様に満足し、人気のなさと、その広さにも感嘆しつつ歩いた。

いまでは、それらの大木が少なくなったこと、森の至るところ人の足跡だらけになったことを嘆きながら歩いている。面積についてもさして広いところと思わなくなった。

私の接した20年間は、何度か襲った台風でたくさん風の倒木がでたり、伐採や植林が進んだりして森の構成が大きく変わってきたほか、周辺部の都市化が激しく進み、マラソン、クロスカントリースキーの場となるなど、森の利用形態も加率的に変化を遂げた期間といえる。

この巡り合わせを大事にして、森の深遠性の存続を模索しつつ植物たちの行方を見極めていきたい。

野幌では、これまで、工藤（1918）、館脇・松江（1934）、館脇・五十嵐（1973）、伊藤・春木・石川（1983）、村野（1987）で確認種が取り上げられている。このうち、館脇・五十嵐はそれ以前の記録を含めて整理し、野幌国有林に自生する植物として503種、外来植物として32種、合計535種の高等植物目録を揚げ、ほかに導入された外来の樹林79種を上げている。

そこで、この目録をベースとして、その後見つかっていないもの、新たに見つかっているものなどについて概要を述べてみよう。

## 2. 近年見つかっていないもの

18年前の館脇・五十嵐の目録にあって、その後観察情報のない自生植物に次のようなものがある。

スズラン、クロユリ、エゾカンゾウ、ノハナショウブ、ミヤマモジズリ、ミツバベンケイソウ、ワタゲカマツカ、センダイハギ、クロツリバナ、クロウメモドキ、オオタチツボスミレ、アイヌタチツボスミレ、カラスシキミ、ハナヒリノキ、ココウラクツツジ、ウスノキ、ナツハゼ、オオバスノ

キ、エゾアガイトウ、トキノキ、ワニグチソウ、ミヤマナルコユリ、ササバギンラン、フタバラン、コハウチハカエデ、ウリノキ、スミレサイシン、カラコギカエデなどである。

## 3. 近年明かに減少しているもの

18年前によく目について、近頃見つけにくくなったものの代表は、まぜラン科の仲間であろう。ノビネチドリ、サルメンエビネ、サイハイラン、アオチドリなどは通常の歩道沿いで見ることができなくなった。

オオバギボウシ、エンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ミヤマエンレイソウ、フクジュソウ、エゾサンゴサクなど春を飾る花の減少ぶりも激しい。

量的に減少の際だつものに、ミズバショウ、エゾノリュウキンカなどがある。

ユキザサ、ギョウジャニンニク、クサソテツなど山菜ともくされるものの減少やわい少化も目に見えるようになった。

これら諸々の減少の原因は各々の生育環境が狭められたことにあるが、人に摘み取られることによることも多い。

## 4. 近年見つけたもの

館脇・五十嵐の目録以降、北海道植物友の会（未発表）、筆者（1987及び未発表）などが新しい確認種を追加し、その数は100種をこえている。在来のもと考えられる植物と侵入してきたと考えられる植物の割合は、おおよそ1：1で、案外に昔の人の記録漏れが多いことがわかってきた。

しかし、やはり帰化植物の増大ぶりが目立ち、全体の帰化植物率を6%から12%に押し上げている。野幌の人工化はこうした面からも読み取ることができる。

在来のもと考えられるものは次のようなものである。

ヒメザゼンソウ、ヒメイズイ、ヒダカエンレイソウ、クモキリソウ、エゾキケマン、カラフトダイコンソウ、ミズタマソウ、キクザキイチゲ、アズマイチゲ、サンカヨウ、ベニバナイチヤクソウ、などで、いずれも局所的に生育している。

これらのうちサンカヨウは、針広混交林の一部

沢沿い数百メートルに限られるので、以前に誰かが森の中に持ち込んで植え、それがそこだけで増えたものと思われる。

このような例は他にもあり、かつて薬草関係者などにより、播種が行われたことを示すものと考えている。

帰化植物には次のようなものがある。

ハルガヤ、タイヌビユ、ニマゼキショウ、セリバオウレン、ワスレナグサ、ハルザキヤマガラシ、キレハイヌガラシ、ヘビイチゴ、ムラサキウマゴヤシ、イタチハギ、タチオランダゲンゲ、ノランジン、ユウゼンギク、アメリカセンダングサ、タウコギ、アメリカオニアザミ、キクニガナ、コウリントンボボ、トゲチシャ、アラゲハンゴウソウ、セイタカアワダチソウ、ブタナなどである。

これらは森の変化につれて盛衰、交代を繰り返し、構成種に変化を見せている。

例えば、中央線沿いの耕作放棄地などに集中的に広がっていたセイタカアワダチソウやユウゼンギクなどは、耕作放棄地に植林が進むにつれて、少なくなり、森の全体の林道に拡散し、目溜りにおしやられている。ユウゼンギクの合間に咲いていたギンセンカの姿は見えなくなっている。

こんごも、それぞれ増減を繰り返しながら新しい種の侵入や消失を含む変化を重ねていくにちがいない。

ほとんどの外来植物は、伐採地、耕作地、林道沿い、園地や施設周辺的人工的なところに進入しているが、セリバオウレンは天然林の真ただ中に生育している。明治か大正時代に、薬草業者が林内に種を撒いたものがすっきりと土着したもののようで面積は少ないが、いかにも自然な感じで株床を構成しており、歴史的な意味でも貴重な存在となっている。

#### 5. チェックリストの作成と利用に向けて

しかるべきリストを作成し、リストの一つひとつを点検し、その後のフォローすると、貴重、希少な植物なども浮かび上がってくる。

そこで、まだ大ざっぱながら、野幌での、最近までの全ての高等植物をリストアップしてみると、植栽木を含め、739種となり、以上のような

ことが解ってきた。

このリストは、変種、品種のわけ方などによって、また、情報提供者の信頼性などによって変わり、十分な点検が必要であるが、これから様々な活用が可能である。

リストの信頼性を高め、リストによって植物の勉強の効率を高めたり、保護や観察などへの活用をみんなでやって行きたいと考えている。皆さん、御一緒に野幌の植物の行方を探ってみませんか。



オオヨモギ

國 兼 治 徳

ヨモギは草餅の材料として古くから使われている山菜である。

私が育った家でも祖母が春にヨモギを摘み、湯がいてザルに干すのが常だった。その頃は、年一回暮れの5日頃に餅搗きをした。鏡餅に始まり、あん餅・豆餅・切り餅そして草餅を搗いた。草餅を作る時は、まず乾燥したヨモギを水でもどし、セイロの糯米の上に置いて一緒に蒸した。あせた草色だが、ヨモギの匂いは搗いている間もただよった。草餅はヨモギ餅とも云う。

父は餅好きで三度の飯が餅でも飽きないふうだった。父は一生の中で大病に罹ったことが何度かある。最初は若い時のおできの手術である。父の話や残された記録をもとに想像するしかないが、幼い父は麻酔なしに押えられて左大腿部の卵大のできものを取り出されたという。想像するだけで身震いする。あとの病気は私の記憶にもあり、アキレス腱の切断、結核と70代後半の強度の下痢である。特にこの下痢は頑固で、市立病院に入院しても止まらず、食物を口にするとまたたく間に排泄してしまった。医者も手のくたしようがなく、父はやせる一方で点滴でかろうじてもっていた。